

会報四月号 至高の視座

目次

- ・ 至高の視座（無敵の視座）
- ・ 主権者として立つ
- ・ 言い訳なき決断
- ・ 全てはあなたの内側にある
- ・ 正しさは存在しない
- ・ 主権者としての責任
- ・ 生きること

● 至高の視座（無敵の視座）

至高の視座、すなわち無敵の視座。それは、あなたがこの宇宙という壮大な演劇の観客席から立ち上がり、舞台そのもの、脚本そのもの、そして演者そのものへと変貌を遂げる「主権者の覚醒」である。

宇宙は百三十八億年という、想像を絶する永劫の時間をかけて、この瞬間を準備してきた。無からの爆発、星々の死と転生、原子の結合、そして生命の螺旋。その途方もない努力、すなわち「造化（宇宙が自己を実現しようとする努力）」の目的は一つ。宇宙が自分自身を「意識」し、自分自身を「表現」するための精緻なインターフェースを創り出すことだった。その最先端に立つ存在が、今ここに在るあなたである。

あなたが「私は宇宙の意志の現出である」「私は、この宇宙が百三十八億年繰り返し返してきた造化の一つとしてその最先端にいる存在だ」と自覚した時、あなたの肉体は単なるタンパク質やカルシウムの塊ではなく、この百三十八億年の重力を宿した神殿へと変質する。あなたの眼差しは宇宙が自らを見つめる眼差しそのものとなり、あなたの決断は存在の因果を決定づける宇宙の法となる。これが無敵の視座である。無敵とは、外敵を打ち負かす暴力的な力の多寡を指すのではない。この宇宙において、あなたの主権を侵し、あなたを脅かす「外部」などそもそも存在しないという絶対的な認識を指すのである。『ヒマンダラ』の構造を見てみれば分かる。全てあなたの内側の出来事なのである。

目の前に立ちふさがる敵、あなたを非難する声、あるいは逃れがたい運命のように見える障壁。それらすべては、あなたという宇宙が、自らの造化をさらに高みへと引

き上げるために、自らの内側に発生させた「現象」に過ぎない。主権者は、それらの現象を「自分とは無関係なトラブル」として排除するのではなく、「自らが引き起こした調律の機会」として完全に包摂する。

●主権者として立つ

至高の視座において、あなたが「主権者として立つ」ということは、この宇宙という広大な空白において、自らの存在理由を証明してくれる他者を完全に、そして永久に失うことである。正解を外側に求める、あの心地よい甘えはもう許されない。神も、社会も、ママもパパも、道徳も、承認も、称賛も、あなたの決断に免罪符を与えてはくれない。

多くの人間は、常に正解を外側に求める。それは社会の規範であり、法律であり、時代が要請する道徳であり、あるいは誰かからの賞賛や承認「いいね」である。しかし、それらはすべて、己の決断に伴う恐るべき責任から逃避するための、甘美かつ卑怯な麻薬に過ぎない。外側に正解を求める「軟弱な期待」を抱いている限り、人間は自らの命を、真の意味で全うさせることはできない。なぜなら、その命のハンドルを自分ではない何者かに委ね、自らを環境の被害者、あるいは時代の犠牲者という安全な場所へ逃がすことができるからだ。自分の人生が、外側の「正解」という既存の物差しによって測られるとき、人はその基準の奴隷となる。そこには、すべてを引き受ける自覚も、因果を背負う覚悟も芽生える余地はない。

主権者とは、その安全な檻を自ら破壊し、嵐の吹き荒れる虚空に、自らの足だけで立ち続ける者のことだ。あなたが「これが真実だ」と断じたとき、それがその瞬間の宇宙の唯一の正解となる。そして、その断定が生むすべての報い、すべての血と涙、すべての反作用を、あなたは自らの命一つで償い、引き受け、永久に背負い続けるのである。

●言い訳なき決断

この「言い訳のなさ」こそが、あなたを至高の座に留まらせる。誰にも弁明せず、ただ沈黙の中で宇宙の意志を現出させ続けること。それこそが、あなたの言（在り方）を金剛不壊のものとし、あらゆる対立を無効化する。世界があなたに牙を剥くとき、それは宇宙があなたを試しているのではなく、あなたがあなた自身の主権を確認するために、その現象を引き起こしているのである。すべては内側にあり、外側には何も無い。これが分かったとき、あなたは初めて、真の意味で「自由」になる。命を全うさせるとは、この自由の極北において、自らの意志で自らの運命を焼き尽くすことだ。

あなたはもはや、幸運を待つだけの弱者でも被害者でもない。あなたは、自らの意志によって世界の構造を決定づけ、自らの行動によって因果を回し続ける「主権者」である。この宇宙の百三十八億年の造化の努力を、「今」という一撃にあなたが集約

させよ。

この至高の視座から見れば、死すらも一つの表現に過ぎない。あなたがその命を使い切り、宇宙の表現を完遂させるとき、百三十八億年の物語はあなたという地点で一つの極点に達する。その誇りと重圧を、背筋を正して受け入れよ。あなたこそが宇宙の意志である。あなたは宇宙の造化の体現である。この厳然たる事実の前に、もはや迷う余地などどこにもない。

●全てはあなたの内側にある

では、なぜ、他者も、凄惨な出来事も、不条理な上司も、すべてをあなたの「内側」と見なすのか。それは、あなたを孤独に閉じ込めるためではない。あなたがこの宇宙の「唯一の主権者」へと覚醒させるための、論理的必然である。その理由を三つ示す。

①観測という「創造」↓あなたが「外側にある」と信じている相手や出来事は、実はあなたの認識というフィルター(≡)を通した「像」に過ぎない。あなたがその出来事を「悪」と見なすから、それは悪としてあなたに対して現れる。あなたが相手を「理解し合えない他者」と定義するから、その壁は物理的な実体を持って立ち塞がる。宇宙そのものに意味はない。意味を与えているのは、中心に座るあなたの眼差しだ。ならば、その意味の源泉はあなた「内側」にしかないではないか。

②統合体としての連関↓あなたは「宇宙が自己を表現しようとし続けている」という事実の一部だ。宇宙という巨大な生命体において、あなたと「相手」は、同じ一つの体の「右腕」と「左足」のようなものだ。右腕が左足を見て「あいつは他人だ、俺とは違う」と言ったところで、それらを動かしている生命の拍動は一つである。外側で起きている不条理は、あなたの内側にある「未解決の課題」や「構造の歪み」が、現実(≡)というスクリーンに投影されたものに過ぎない。

③主権を奪い返せ↓「相手が悪い」「運が悪かった」「指示が間違っている」と、原因を外側に置くなら、あなたはその事象に対する「統治権」を失う。外側のせいにする者は、外側に支配される「奴隷」だ。「この出来事は、私の宇宙が私に何を表現させようとしているのか」「この上司の狂気は、私のどの在り方を試しているのか」と、すべてを自分の内側の問題として引き受ける時、あなたはその事象の「主」となる。

しかし、あなたは「相手も出来事も俺とは違う」と言うかもしれない。だが、その「違い」を感じ、苦しみ、憤っているのは、他ならぬあなたの「内側」ではないか。あなたの外側に、あなたの意識が関与しない世界など、あなたにとって存在しないのも同義だ。あなたが「すべては俺の内側だ」と腹を括るとき、世界は「変えられない障壁」から「書き換え可能な自分の領土」へと変貌する。愛も、構造も、裏切りも、死も。すべては、あなたという存在が、自らを完成させるために呼び寄せた「舞台装置」なのである。ならば、あなたは、いつまで自分の人生という劇場の「観客席」に

座って、舞台の不出来を嘆いているつもりだ？舞台の上に立ち、すべての配役を、すべての悲劇を、自分の内なる物語として飲み込め。その時、あなたは真の主権を手にする。

●正しさは存在しない

そもそもこの世界には、誰にとっても正しい、証明可能な客観的正解など存在しない。スナイパーが引く引き金に「聖なる調律」という物語を乗せるのも、単なる「残忍な殺人」と断じるのも、どちらも主観的な解釈でしかない。宇宙の本質は、「現象の連続」である。そこに意味という光を当てるのが、人間の、そして主権者の役割である。「主観に過ぎない」という事実は、無力さの証明ではない。それは「自由と責任」の源泉である。凡夫は、他人が創った解釈（既存の道徳、法律、他人の評価、承認、「いいね」、称賛）に依存して生きる。しかし、主権者とは、自分の行動に「如何なる意味を持たせるか」を、自らの意志で決定し、その解釈が生むすべての結果を独りで引き受ける者のことだ。スナイパーの例で使った「聖なる調律」や「残忍な殺人」という解釈は、誰かを信じさせるためのものではなく、「責任を負う主権者」として自らを統合するか「ただの加害者」として崩壊させるのか、その選択肢の提示である。

己の正しさとは、世界のどこを探しても見つからない。それは、あなたの内奥に広がる静寂の深淵にのみ存在する、誰にも侵されない聖域である。それは「主観」と呼ばれる。しかし、それは単なる個人的な好悪や、気まぐれな感情、あるいは刹那的な欲望ではない。それは、宇宙があなたという唯一無二の個体を通じて自己を表現しようとする際の、純粹で非情なまでの意志の奔流である。繰り返しになるが、主権者とは、自らの解釈によって世界を塗り替え、その解釈から生じるあらゆる摩擦、反作用、怨嗟、そして破壊の報いを、自らの命一つで償う覚悟を持つ者のことだ。この「言い訳のなさ」こそが、あなたを人間という狭い檻から解放し、至高の視座へと押し上げるのである。他人に理解されることを望む必要はない。理解されたいということは、あなたが他者の枠組みの中に収まりたいということであり、それは主権の放棄を意味する。

●主権者としての責任

武道の本質が「殺し」にあったという冷徹な事実は、この主権者の責任を最も残酷な形で浮き彫りにする。戦場という極限の状況において、相手の命を断つという実行(MIN)に際し、そこに「正義」や「防衛」という安っぽい言い訳を差し挟む余地はない。あるのは、その死を自らの存在の欠損として受け入れ、奪った命の分まで自らが宇宙の表現として歩み続けるという、主権者の孤独な沈黙だけである。芸術家が家族を犠牲にして作品を遺すとき、その作品に宿る神々しさは、彼が背負った「悪魔としての刻印」の代償である。主権者は、聖者と悪魔の顔を同時に持ち、そのどちらか一

方に逃げることを許されない。罵詈雑言も称賛も、その両方を同じ重さで自らの内側に統合し、誰にも弁明しない。ただ道に献身し続ける。その姿に、宇宙は自らの姿を見るのである。あなたが自分自身の主観を信じ抜き、そのために命を投げ打つ覚悟を決めたとき、初めて命が輝き始める。そのときようやく、宇宙百三十八億年の最前線に立つことになる。

● 生きること

生きることは、もはや単なる生存の継続でも、娯楽の消費でもない。それは、あなたが刻一刻と、この宇宙という巨大な空白に「意味」という命を吹き込み続ける、壮大な儀式であり、戦いである。言い訳を捨て、すべての因果を自らの内に引き受けよ。あなたが流す涙も、あなたが振るう剣も、すべては宇宙が自らを体験し、自己を完成させるためのプロセスである。軟弱な期待を完全に断ち切り、ただ独りで、この宇宙という広大な舞台の中央に立ち続けよ。背後には数千年の武の伝統と歴史が、前方には数千年の未来が、すべてあなたの影となって付き従う。あなたが下す一撃、あなたが発する一言が、未来の数千年の人類の鼓動を決定づける。その圧倒的な重圧を、人生の醍醐味として受け入れよ。

主権者よ、覚悟を決める。あなたの命はもはやあなた一人のものではない。それは、宇宙が自己を表現し尽くすための神聖な存在なのである。あなたの歩みが道となり、あなたが語る言葉が法となり、あなたの行動が構造となる。この厳肅なる孤独を受け容れよ。あなたは、世界を支配する者ではない。あなたが、世界そのものなのだ。この自覚と覚悟が、あなたの細胞の隅々にまで行き渡るとき、あなたの存在と行動が世界に永遠の響きを残す。

言い訳なき人生を、至高の視座から完遂せよ。